

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4071900908		
法人名	有限会社 ベストケアカンパニー		
事業所名	いきいきハウス日吉町		
所在地	福岡県田川市大字鞆2264番地1		
自己評価作成日	平成26年4月17日	評価結果確定日	平成26年5月3日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://kohyo.fkk.jp/kaigosip/Top.do">http://kohyo.fkk.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	平成26年4月26日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

平成15年4月の開設以来、地域と共に認知症高齢者の生き甲斐ある生活を支援していく事を主眼として、活動性の高い介護サービスの提供を行って参りました。当初に掲げた理念・目標に近づきつつある事を実感できるようになってきたと思っています。また、ご利用者様から様々な事を気付かされながら、介護サービスの向上に繋がる事例が夥しく多いということも、この事業運営の特色であると改めて思います。その意味において、多様な経験を積まれた高齢者の行動を、多面的に肯定的に評価しサービス向上に繋げる過程は、職員サイドの人間力の涵養なくしては成し得ないとの認識を深くしております。昨秋10月1日より、これまで蓄積された介護ノウハウを取り入れた新施設が完成し、サービス提供が始まりました。今後はこの充実したハードを活かし地域連携を継続・深化しながら、有能な介護人材育成にも傾注したいと思っております。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

隣家の躰躰が満開で、フェンスに囲まれながらも開放的な陽射しを浴びた「新しいいきいきハウス日吉町」は、移転に伴う職員達の心配が安堵感に変わるほど、笑顔で穏やかにいきいきと過ごす入居者たちの姿から、理念の実践が伺え、快適な住まいとなっている。代表は理念の実現に励みたいと、ハード面の充実と共に研修にも力を入れ、職員の質の向上に取り組んでいる。関係の悪かった入居者同士が、双方にとって良い関係づくりの支援で、明るく穏やかに過ごされるまでなったり、介護のプロとして接することで落ち着き、家族との関係が修復して、訪問が継続している入居者もある。また、切れ目のない支援で、失禁が減少した入居者は自信を取り戻し、いきいきとした表情になっている。10年来の地域との交流の積み重ねは、グループホームを知っていたく努力が実り、家族の感謝と地域を味方にして、今後ますます地域密着型サービスの充実が期待できる。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

ユニット/  
事業所名 **いきいきハウス日吉町**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新施設の開設当日に、玄関ホールに経営理念と施設運営理念を掲げ、職員各位への意識啓蒙、利用者ご家族への周知を通じて実践に繋げる一助としている。	移転に伴う職員達の心配は、大喜びの入居者たちが笑顔で穏やかに暮らす様子に、ほっとした安堵感に変わっている。いきいきと過ごす入居者たちの姿こそが、理念どおりであると感じている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	行政区との繋がりは、開設以来地域行事や日常的な共同作業等を通じて行われている。公立病院の地域連携室や地元小学校との交流、スーパーマーケットへの理解と協力により、日常から実践的交流が行われている。	新ホームオープンの際には、民生委員や近隣の方々を招待し、多くの方が来所されている。代表は今までどうり区の会議に出席し、避難場所に指定されている地区の小学校が遠いため、近くの広場が使えないかなど意見を述べている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	行政区の会議では、転倒予防への意見を求められて発言を行ったこともある。独居高齢者の安否確認について民生委員とともに名簿とマップ作りを行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	昨年度は防災や行方不明対策等の事例について発表した際の意見に対して、取り組みを行って回答を行っている。	2ヵ月毎の運営推進会議には、組長や民生委員、市役所の職員、また家族の参加もある。移転後の会議では、ホームのハード面の充実について説明し、納得を得ている。会議録は行政に提出している。	整備した会議録を今後十分に活かすためにも、会議の内容報告も含めたいきいきハウス便りを作成し、入居者の家族や近隣の公民館などに、ホームの情報発信の検討をお願いします。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当部署への報告・相談は緊密である。地域包括支援センターとの意見交換も随時行い、相互訪問も行われている。	地域包括支援センターから、困難事例や受け入れの要請などの相談が多く寄せられる。ホームからは、入居者家族の異変などを報告し、連携を図るよう努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束排除の意義や実践については、各研修や勉強会を通じて職員間の均一な理解が浸透していると思う。行方不明対策としての行政から要請のある、施設内施錠やフェンス囲い込み等に対する取り組みに課題が残る。	新ホームは敷地も広く、フェンスによる囲いも解放感があり、防犯カメラや出入口にはセンサーを設置している。職員達は「ダメ」「待って」の言葉の拘束も理解し、散歩や買物で入居者と行動を共にして、身近に接している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	前記に準じて職員間の理解は浸透している。利用者ご家族間の関係において、やや疑義のある事例もあり、行政担当者とも連携を取りながら、実態把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	前記に準じるが、制度については難解な部分もあり職員の理解はまだ十分ではない。少なくとも、相談があった場合、責任者に繋がぐか相談窓口へのアクセスの紹介を行えるよう、パンフレットの準備をしている。	日常生活自立支援事業と成年後見制度の活用者は現在いないが、入居者の中に弁護士が介入して遺言状を作成されている方もあり、理解を深めるため研修を行っている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時、十分に行い理解を得ている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議で、ご家族の参加を促し、行政担当地域代表への意見開陳があることをもって、運営に反映させている。ご家族は、その参加者が偏らないように、万遍なく参加呼びかけを行っている。	家族や入居者の様々な意見を活かして、新ホームの創設をしている。新ホームがバス停に近く、家族から来訪しやすくなったとの意見があった。自転車で頻繁に訪れる家族や、兄弟で待ち合わせて訪問される家族もあり、お話を伺う機会が増えている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティングや月例会議において、予め提案や意見を準備して参加するよう呼びかけて開催するようにしている。	月例会議や日々のミーティングでは話しやすい雰囲気づくりをしている。食卓はキャスターなしの椅子にしてはとの意見が採り上げられ、購入されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	計数的把握が困難な評定に、一定の客観的水準を設けて、信賞必罰の人事考課を取り入れている。労働環境について一方的解釈にならないよう、36協定締結時において職場代表と意見交換を行っている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	募集・採用について、一般的職種については、人物本位を第一義とし性別は勿論年齢や資格についてフリーとしている。前述の人事考課において、職員の権利を重視するスタイルを採っている。	ハローワークで募集され、経験年数を考慮した研修への参加で、質の向上を図っている。高齢者との接し方を研修し、資格取得は勤務時間の配慮や費用の補填などを支援している。新ホームは、更衣室と休憩室が設置されている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	各研修や勉強会を通じて、周知させるべく啓発を行っている。	利用者及び代理人の権利として契約書に明記され、常に入居者への尊厳を忘れない対応を、理念に基づき意識させている。年間研修スケジュールに組み込み、CD-R研修に合わせて事例検討を学習している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員のケア技能や職能については、仕事を通じて把握しており、それに見合った研修への参加を推進している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	認知症専門病院が主催する、地域ケア交流会に職員を参加させ、交流と意見交換の機会をもっている。		
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期アセスメントの段階で得た要望は、計画担当者と介護スタッフの情報の摺合せにより、適切なモニタリング作業を通じて見直し、満足の実現に生かしている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	前述同様、現状報告と拝聴を繰り返しながら、適切な方向へと推進している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初回の相談の際、客観的に見極めを行い、必要なサービスは何か、をまず探っている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	常に、認知症高齢者の共同生活とは何なのか、という観点を忘れずに、時には原点回帰を行いながら趣旨に近づける工夫を行っている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	可能な限り、職員と共同で、高齢者を支える仕組みを説明し、協力関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	墓参や実家への一泊帰宅など、支援できることはあくまでさりげなく行えるように、支援している。昨年は誰でも知っている古い喫茶店に行って懐かしい雰囲気を感じたような事例もあった。	入居者に喜ばれている新ホームは、家族からも訪問しやすくなったと評判で、回数や人数が増えている。入居者にとって大切な関係の継続を職員達は常に心がけ、来訪を歓迎したり、入居者の誕生日当日は、家族の訪問を是非にとお願いしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係は、日々変化する事もあり、適宜状況に応じて対応している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	事業所として入院や自宅復帰に対しては、綿密に退去後のフォローが行えている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントによる他、日々の情報を活かして適切な意向の把握を行うように努めている。表面的な意思確認だけではなく、ご家族や管理者等による深層心理分析に基づいた本音を把握するよう、情報収集と分析を行っている。	入浴や散歩はマンツーマンで行われるため、密に入居者と接する機会と捉え、思いや本音を伺っている。入居者同士で勝手に兄と思いついた入居者が暴言を吐き、悪い関係となっていたが、職員の支援で双方ともに良い関係に修復できて、落ち着いた生活ができています。言語で表せない利用者の思いは日ごろの言動や表情から把握することが重要と管理者は常に指導している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	初期利用時は勿論、随時情報把握に努め、実践している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護スタッフからの日々の情報は、管理者や計画担当者へ連絡と提供され、体系的な介護情報としてストックされている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族へは、月例報告を通じて様々な行動や問題点、その対応の報告を通じて理解と要望を取得し、計画に生かしながら進めている。	2週に1回のケアマネージャーとのカンファレンスで情報が共有され、入居者や家族の意向を踏まえた計画が作成されている。より密な関わりの中でモニタリングされ、更なる計画への反映を職員達は話し合っている。	介護計画の目標の設定を具体的に記載することで、容易にモニタリングでき、更に個別性のある介護計画立案となることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録を活かしながら、現状の把握と問題点、対処の方法まで幅広く共有している。日々の報告において、計画担当者への報告をおこなっている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	多様化の要望となった事例において、他の在宅サービス選択や施設対応など、幅広く対応を行っている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	生き甲斐に繋がる事例としては、公立図書館の利用、百貨店で買い物、クリスマスイルミネーション見学など、柔軟に対応している。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者ご家族と協力しながら、適切な医療機関の選択、受診を行っている。	入居前のかかりつけ医を大切に、家族へ受診をお願いしているが、都合により職員が同行したり、送迎を職員が支援することもある。2週に1回の訪問診療が行われ、専門医受診は職員による状態報告などで連携している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	相談・連絡体制は、日々の業務報告と同様にて適切に行い、24時間の管理体制を採っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院当初から、事業所として関係医療機関との連携を行い、入院中の支援、早期退院に向けての取り組みを行っている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用開始時に、要望の確認をおこなっている。ある程度重度化が進行した際に、改めてご家族の意向確認を行い、主治医と連携して、終末期におけるケアの在り方について方針確立を書面で行っている。	重度化に対する指針を示し、入居者や家族の理解は得ているが、現在入居の方が皆お元気で、意向の確認までは行われていない。昨年9月、緊急搬送され亡くなられた入居者は身寄りがなく、ホームで葬儀を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時及び事故発生時の対応マニュアルを作成し、適切な運用を期すべく、月に1度程度の確認作業を行っている。特に、行方不明と心臓停止の場合について、頻回に確認を行っている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地元消防団への要請を行い、災害等の緊急時の連絡方法と支援要請を行っている。職員は、防災訓練を通じて避難誘導等の基礎技術を身につけている。	スプリンクラーや緊急通報システムが設置された新ホームで、先月初めての避難訓練が実施された。消防署の指導で消火器の取り扱いなども学習している。水や食料など3日分の備蓄も行っている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権研修が浸透し、人を思いやる心、尊重、敬慕の心が育ってきつつある。	入居者の言動はまず受け入れることを心がけるように、管理者は指導している。職員は入居者に氏名で声かけしているが、時に自分の下の名前を職員に尋ねたり、記憶の中の自分が婚姻前の状況の入居者には、敢えて下の名前でも声かけすることもある。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者との関わりは緊密で、表出する要望に対し、その深部の原初的欲求への働きかけができるようになってきた。100%を目指したい。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	前項と同じ		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日々起床時の整容、着衣の自己選択、特に外出の際、身だしなみを気にさせる事によって社会性を持たせることに傾注している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好きなもの、食べたいものを優先して提供する。食事作りへの関与は可能な限り利用者参加にて行っている。配膳・下膳・洗い物への関与は自然で、テーブル拭きは男性利用者も率先して行うなど協働関係ができていく。	対面式のオープンキッチンとなり、フロアの入居者たちと食事作りをしている職員との会話も楽しく弾んでいる。出来上がった食事を「皆で食べるとおいしいね」と男性入居者が話しかけ、職員たちも同じ食事を同じテーブルで食べながら、気配りしている。食後は、2名の入居者が慣れた手つきで職員とともに洗い物をするのが、いつもの風景となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	病歴にもよるが、標準で摂取カロリー1600キロ以上、水分1600cc以上を毎日の目安とし、ほぼ全達成である。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者は毎食後、自主的に歯磨きをし、磨き残しについて職員のチェックを受けている。訪問歯科医が毎週訪問に来て、口腔内衛生管理と処置を行っている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	利用開始時、おむつであった利用者が、昼夜リハパンツでトイレ排泄が常態化するなど、早期から排泄パターンの改善に取り組む事によって、目覚ましい成果を挙げている。	排泄リズムと水分摂取量を把握した職員達は、介護のプロとしてチームで切れ目のない支援を行うことで、失禁を確実に減らしている。失禁が減少した入居者は自信を取り戻し、表情も生き生きとしている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	できる限り自然排便を促せるように、食物繊維の摂取、水分、適切な運動、マッサージ等への取り組みによって、排泄困難の問題はあまり提起されない現状である。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	1日おきの入浴を実行している。曜日と時間は決まっているが、気分や体調等を観ながら、変更を行える柔軟な対応を行っている。	入浴は、1名ずつ個別に支援している。家庭的な雰囲気のある浴槽は、明るく転倒防止や室温などが管理されている。入浴を拒否される方はなく、際立つこともなく浴室へ行かれた入居者が、さっぱりした顔でリビングへ戻るなど、皆楽しみに入浴されている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夕食から入眠までの過ごし方は、各人の過ごしやすいようにされており、穏やかな就寝時間が確保され、不眠の訴えは稀である。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療機関の情報を蓄積するとともに、薬局が発行する薬手帳により職員が薬効や効能を理解・把握している。薬の変更についても適切に対応できるシステムである。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の嗜好、生き甲斐、好きなことへの取り組み、実践について、適切な対応ができています。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩のほか、雨天時のドライブ、季節めぐり、催事への参加等を通じて、希望を最大限生かした支援を心掛けている。	職員と共に出かける散歩や買物が、日常となっている。皆で出かける近くの温泉行きは、昼食の刺身定食とともに、入居者たちの楽しみになっている。先日の花見は、バーベキューをして喜ばれている。系列事業所との合同誕生会や合同運動会も盛り上がる行事である。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	事業所の判断により、自己にて金銭管理ができる方でも、ごく少額しか所持していない。但し、私物の買い物は必ず本人が同行し、預かり金の中から代金を本人に支払わせることによって、使える安心感を提供している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は、ご家族のいる時に限り、支援することとしている。手紙による音信等は、適宜支援を行っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を演出する工夫をしながら、さりげなく混乱の起きないような取り組みができています。(トイレ位置や個室の位置について)	季節の花で飾られた玄関に足を踏み入れると、明るく清潔な気持ちよい空間が広がっている。オープンキッチンからは昼食の良い香りが漂い、リビングにはテーブル・椅子の他、広い掃出し窓際のテレビ・ソファ・マッサージチェアなどで寛ぐ入居者の姿がある。居室へ向かう廊下の両側に清潔でゆったりとしたトイレが3箇所設置され、1箇所は男性用の小用が併設されていた。窓ガラスや天井、壁の桜の飾りが季節感とともに心地良さを醸している。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブルやソファ、調度の配置を工夫し、人と離れて安息できるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具や生活用具は、本人と話しながら生活しやすい配置をしている。	トイレの奥の廊下の両側に6室が並び、3室はリビングに面している。それぞれ入居者の名前が入り口の引戸に貼られ、ベッドと筆筒が備え付けられている。壁紙の柄が部屋ごとに異なり、持込の布団や小物で落ち着いた居室となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	様々な危険を予測し排除していく過程でより安全な環境になっているが、固定観念でなく利用者の状態変化、新規利用者の状態等によって、自立支援の観点から変化させていくものであると認識している。		